B—64　家庭用手編機におけるゲージのとり方に関する一考察

県立新潟女子短大　多田　千代
小野日出子
平沢　和子

1. 編物製品を作る場合，ゲージを選定する条件にはいろいろあるが，そのゲージで作られた製品が，編成過程で受けた変形を回復するための伸長や収縮をしないことも重要な条件である。ここでは，そのような観点から，ゲージのとり方について再考察を試みた。

2. 家庭用手編機（B社・T社の2種）を用いて，編目調節目盛（9,7,5,3）や，編成過程でかける荷重の有無などの諸条件下で試料編地を作り（平編20cm×40cm，純毛中細毛糸使用）編みおろし直後のゲージが，時間の経過やその他の条件により変化する様相を観察した。併せて着用中の純毛セーター30枚につき，その編目の目数と段数の比を調べた。ゲージのとり方は，試料編地を二つ折りにし，三方を綴じ合わせ（セーターの場合はそのまま）平らな台上に乗せて，ほぼ中央部で，10cmに最も近い整数の目数と段数を数カ所選定してそれらの長さを置尺によりmmの単位まで計った。

3. 着用中のセーター，および試料編地で変形が安定したものでは，目数と段数の比はおよそ 4:5 になっていた。編みおろし後，編地を自然放置した場合に，この比率に至るにはおよそ30日を要し，編目が小さい場合ほど長時間を要する。はじめの 2〜4 時間では，変形は安定時の20〜30%しか進行しない。洗たくまたは蒸気仕上げは，この時間を早める。ゲージは安定な比率に至ったものについてとるべきである。